

# 中国社会における「早恋」をめぐる規範への考察

CHEN Weiyi

中国社会では中高生の恋愛を表現する際に「早恋」という言葉が使われる。この言葉は一般的に「早すぎる恋愛」の意味を持つが、「学校での恋愛」の意味で使われると、ある種の危うさと興奮を帯びてくる。なぜなら大人からの規制や監視を受けるという感覚や、ルールを破ると悪い結果になる可能性を示唆しているからである。一方、「早恋」問題は中国社会においては 1980 年代に提起され、思春期を迎えた生徒には特に注意と予防が必要だとして、どのように生徒とコミュニケーションや教育を行い、どのように「早恋」現象の出現を減らすかに重点が置かれてきた。言い換えると、「早恋」行為は生徒の「逸脱」行為として扱われやすい。そこで、問題行為に対処するために、「早恋」が規制の対象となってきた。

中国社会では、未成年者の喫煙、飲酒、喧嘩などは(未成年の健康に悪影響を与える行為として)法律で規制されており、中学校や高校の校則もこれらの法律に準じて制定されている。また、未成年者の日常的な娯楽活動であるゲームについても、2021 年 8 月 30 日に国家新聞出版局が「未成年者のオンラインゲーム中毒を防止するための一層の厳格な管理に関する通知」を発表し、未成年者にオンラインゲームサービスを提供する時間を厳しく制限した。こうした規制とは対照的に、「早恋」には法的な規制はなく、「校風管理」の部分に位置づける学校もあり、教育関係者の中には「早恋」教育を道徳教育の一部に組み込んでいる者もいる。

「早恋」教育あるいは規範の文脈で提示されるメディア表象に関して、学校における思春期の恋愛を詳細に、かつ支援的な視点で描いた作品はマスメディア全体の数では少ない。映画やドラマの中で「早恋」というテーマに触れたのは、1986 年に中国の思春期の恋愛を反映した映画が最初であり、90 年代は公式には認可されない「地下(独立)映画」で描かれる程度であったが、2010 年代以降では学園青春のネットドラマでも「早恋」が描かれるようになった。ただ、これらのコンテンツの創作において作品と「早恋」規範との間には常に緊張した探り合いの関係があり、「早恋」の規範を超えた作品は棚上げにされる危険性があった。その一方で、「早恋」規範の影響が薄い、大学入学前の学園恋愛のフィクションとしてのキャンパス・ロマンスがネット上の恋愛小説として登場しており、中高生の間で広く消費されているのも事実である。

一方、中国社会の「早恋」規範が広く存在する背景について、性教育の分野では、現在の「早恋」

教育には限界があると指摘され、心理学では「早恋」表現の使用には慎重さが必要だと呼びかけることが多いが、研究のほぼ半分を占める教育学の分野では、「診断—治療(矯正)」というレトリックが用いられている。社会学の分野では施旖旎は「早恋」がどのように規範として構築されているかを言説分析の手法で検証した。つまり、「早恋」の定義の基準はそれぞれで異なるものの、中国の中等教育段階にある生徒は「早恋」教育の規律・訓練の対象とすべきだと考えられてきた。ただ、この規範が不完全なものであることや、なぜこの規範が中国社会で構築されているのかといった分析がまだ不十分である。その背景には、中国の後期中等教育の大きな二つの流れがあり、少なくとも中等職業学校の生徒にとって、「早恋」はそれほど強く規制されてはいないことがある。つまり、これまでの研究では、「早恋」という規範の「機能不全」性が見過ごされてきた。

そのため、本論では、中国社会における「早恋」規範について、中国独特の学校制度における生徒たちの規範の受け止め方を、「規範の内面化」および「規範からの逸脱(規範の機能不全)」という二点に特に注目しながら考察していく。

具体的には、まず「早恋」規範とは何かについて、第 1 章では中国のマスコミの異なる時期の「早恋」を題材にした作品を整理した。これらのマスコミの作品において、「早恋」は語られないもの—見えるもの—含蓄のある手法で表現されるものへと発展してきた。「大学までは恋愛をしてはいけない」という規範が常にこれらの作品に影響を与えてきたわけである。

第 2 章では、「早恋」をめぐる規範が思春期の少年少女にどのように内面化され、それにはどのような異なる教育と説得の論理があるのかについて、『児童文学』誌に掲載された「早恋」テキストの内容分析を通じて「早恋」規範の説得ロジックを分析した。同誌の「早恋」小説では、身内や教師のような大人の多くが「早恋」者の個人的な損得、将来の考えの角度から説得を行ったり、「早恋」関係内にある生徒たちが自分自身を説得したりしていた。後者では、周囲や社会の眼差しや、社会の公序良俗に挑戦することへの恐れから自分を説得していることが多い。このような規範は内外の 2 つの方向から、思春期の段階にある主人公たちを拘束していた。彼らは最終的に恋愛関係の構築を放棄し、「恋愛はダメ」の規範を内面化したのである。

第 3 章では、「早恋」教育が行われる現場として、どういう学校制度と規範の下に生徒たちがいるのかを論じた。後期中等教育における「早恋」教育の程度は学校の種類によって異なり、「早恋」率も異なる。進学率を求める普通高校の「学業に影響しないことを前提とした」厳格な「早恋」管理の雰囲気に対して、中国の後期中等教育の 40%~50%を占める中等職業高校では、生徒の恋愛を「提唱しない、反対しない」という基本的態度を取っている。職業高校の教師が管理している生徒の恋愛に対しても「片目を閉じた」態度をとっていることが多い。そして中学生よりも普通高校、中等職業学校の生徒の方が恋愛が盛んで、中等職業学校の生徒の恋愛状況はこの 3 つの間で最も一般的であった。また、「早恋」規範は進学を優先させる中国の教育制度と密接に関係しているものであ

り、リスクを回避する功利主義的なロジックとして生徒を説得することであった。

第4章では、「早恋」をめぐる規範を生徒たちがどのように受け取る、あるいは受け流すのかについて明らかにした。普通高校の生徒に比べて、中等職業高校の生徒は行為の上で「早恋」率が高いだけでなく、意識の上でも「早恋」に対する認識が肯定的になることが多い。そして「早恋」をめぐる規範を内面化している生徒たちとその逸脱者たちを比較すると、「早恋」の規範を守ることを選んだ生徒であっても、大人の「早恋」教育に対する単純な従順さからではなく、自分自身もこの規範を守ったほうが自分の発展に有利だと思っている一方、「早恋」を選んだ中等職業学校の生徒は、目先の本能的な欲求を満たすためだけではなく、現在の経済的あるいは心理的なメリットと、将来的な損得とのあいだで揺れ動いていることがうかがえた。普通高校で「早恋」規範から逸脱する生徒は、「早恋」を学習の原動力とする積極的な態度の特徴を持っており、「早恋」教育に対しては抵抗もせず完全に従うこともせず、「ほおっておく」と「表面的同意」という策略をとり、こっそりと自分の「早恋」行為を続けているのである。

このように、本論では、中国のマスメディア作品における「早恋」規範の「強制」性や、『児童文学』という教育的な雑誌が小説の形で「恋愛回避」の説得や教育という目標を達成していることを論じてきた。こうしたマスメディアにおける「早恋」表象では、規範の教育が効果的である事例が多く見られたが、中国の後期中等教育における「進学」志向の普通高校と「就職」志向の職業高校における「早恋」の教育現場に注目すると、現実には複雑な様相を呈していることが明らかとなった。中でも、中等職業教育における「早恋」をめぐる規範は、より緩やかであり、規範の機能不全は中国の普通職業教育の分流と密接に関連していた。「早恋」規範は教育現場において、「現在の欲求を遅らせることで、将来的に(より良い恋愛関係を含む)報酬が得られる」という説得によって実行される。そして、生徒一人ひとりが自分の将来設計から意識的に自分を規制し、「早恋」規範を内面化しているのである。その一方で、規範から逸脱する生徒たちは、規範に対してことさら対立的なわけでも、また快樂におぼれているわけでもなく、親や教師からの規範の押しつけをかわしながら、自らの意志で「早恋」を実践していた。その意味で中国社会における「早恋」規範は、半ば受け入れられ、半ば受け流されている。つまり、規範として機能しつつ、その一方で破綻もしているという「機能不全」状態のまま存在しているのである。